幅地区における墓域の土器廃棄遺構と出土土器

石田 智子

いしだ・ともこ、鹿児島大学法文学部

はじめに

阿蘇カルデラ内では弥生時代中期以降に遺跡が増加し、特に阿蘇谷西部には狩尾遺跡群や小野原遺跡群などの弥生時代後期を主体とする集落が密集する。幅・津留遺跡は南郷谷に所在し、弥生時代中期から後期の長期間にわたる集落として非常に重要な遺跡である。

幅地区の墓域は、土坑墓・木棺墓などの墳墓と、その周辺に位置する土坑・溝で構成されている。土坑や溝には、多量の土器が廃棄されている。墳墓周辺の土坑や溝に土器を廃棄する行為は、弥生時代中期を中心とする北部九州地域一帯で共有される葬送儀礼に関わる風習である。

本稿は、幅地区の墓域でみられる土器廃棄遺構および出土土器を検討することで、葬送儀礼に関わる人間行動や地域間交流を明らかにすることが目的である。まず、北部九州地域の墓域・集落域における土器廃棄遺構の時期変遷と地域的特徴を把握した上で、幅地区の土器廃棄遺構を評価する。次に、出土土器の特徴を検討する。遺構と遺物の特徴を踏まえた上で、九州全体の弥生社会の動向に幅・津留遺跡を位置づける。

1　幅地区の墓域における土器廃棄遺構の特徴

1-1　幅地区の墓域における土器廃棄遺構

幅地区の墓域で確認された墳墓は、木棺墓、土坑墓、木蓋土坑墓、側面横穴式木蓋土坑墓の 4 種類がある。土器廃棄遺構は、SD2・SD3・SD9・SX11 である。墓域と集落域は溝 SX10 で明瞭に区分される。土器廃棄遺構の出土土器の時期は、弥生時代中期後半～後期前半が中心である。

墳墓と土器廃棄遺構の関係をみると、両者が重複することはない。土器廃棄遺構と密集する墳墓群の間にわずかに空間が存在することから、墓域の利用が開始された早い段階で土器廃棄遺構が設置された後に墳墓群が周辺で造営されたと推測できる。土器廃棄遺構の設置当初は墓群の外側を区画する意図があった可能性もあるが、墓域範囲が通時的に西から東へと拡大するにともない、結果として土器廃棄遺構は墓群の内側に位置することになった。また、土器廃棄遺構の床面の凹凸が少ないことから、土坑を複数回掘り返すことはなく、開放された土坑に継続的に土器が廃棄されたと考えられる。

1-2　北部九州地域の墓域における土器廃棄遺構

弥生時代には、日本列島各地で多様な土器祭祀が行われた。墓域における土器祭祀については、①個人墓への小型壺の副葬→②集団に対する儀礼行為と儀器の廃棄→③特定墓域・特定個人墓への高杯を中心とする土器群による供献行為という 3 つの様相が弥生時代期間中に漸移的に変化することが指摘されている（古屋 2007）。北部九州地域も日本列島全体の動向に呼応して、弥生時代開始期～前期は土器の副葬、中期は土器の廃棄、後期は土器の供献へと移行する（石田 2009）。石田（2009）を基に、時空間変遷を述べる。

［弥生時代前期］

墓域の土坑や溝に土器を廃棄する行為は、弥生時代前期中頃～後半の筑紫地域・佐賀地域ではじまる。具体的には、三国の鼻遺跡（小郡市）、四本黒木遺跡（神埼町）などである。

墳墓周辺に設けた土坑から、1 ～少数の完形小壺が出土する。これは、弥生時代開始期～前期の個別墳墓に土器を供献または副葬する行為から、中期以降に墓域にともなう土坑に多量の土器を廃棄する行為へと変わる過渡期にあたる事例である。

［弥生時代中期初頭～中頃］

弥生時代中期初頭以降は、墓域にともなう土坑や溝からまとまった数量の土器が廃棄または埋置された状態で出土する。佐賀東部地域・筑紫地域・福岡地域に分布中心があり、筑豊地域・周防灘沿岸地域でも少数事例がある。具体的には、弥生時代中期初頭～前半の永岡遺跡（筑紫野市）、陣ノ内遺跡（筑穂町）などがある。

土器は、1 ～少数の完形小壺が中心である。無塗彩土器が主体であるが、黒彩土器や赤彩土器も少数みられる。土器は、塗彩の有無にかかわらず、ミガキ調整

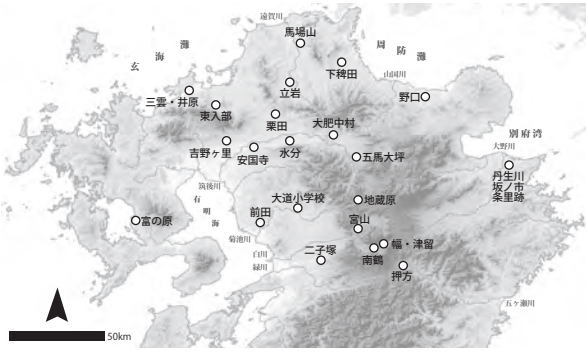


図１　幅遺跡の土器廃棄遺構関連遺跡

などで非常に丁寧に製作されたものである。

土器が廃棄された土坑や溝は、二列埋葬墓の両側に平行する位置に設置されている。つまり、墓域に所在する土坑や溝を設置する本来の目的は墓域の区画であり、葬送行為に用いられた土器を廃棄または埋置するのは二次的な利用であるといえる。

弥生時代中期中頃になると分布域が拡大し、甕・高杯・筒形器台などの壺以外の多様な器種や赤彩土器の使用が増加する。

注目されるのが、中期初頭～後半にかけての早良平野の区画墓である。東入部遺跡第２次調査や浦江遺跡第５次調査（福岡市）では、墓域を囲む溝や土坑から、長期間にわたる多量の土器が出土する。特に東入部遺跡では、中期前半の黒彩土器から、中期中頃～後半の赤彩土器へと比重が移る過渡的現象を確認できる（石田 2013）。

［弥生時代中期後半～末］

弥生時代中期後半～末には、筑紫地域を中心として、筑後川流域の日田地域、周防灘沿岸の宇佐地域など、墓域にともなう土坑や溝に土器を廃棄する行為が北部九州地域一帯で行われる。しかしながら、土器廃棄遺構と墳墓の位置関係、出土土器の器種組成や赤彩土器の出土比率、完形比率などの点で、各地域で多様性が生じる。

筑紫・筑後地域では、基本的に墓域や墓群の外側に土器廃棄土坑や溝を設置する。甕・高杯を中心とする多様な器種の土器を墓群周辺の土坑や溝に大量に廃棄する。出土土器の多数に赤彩やミガキ調整が施され、非常に丁寧なつくりの精製土器を使用する傾向が強まる。

また、複数回にわたって小土坑を設けた結果大型土坑となる場合があり、継続的な行為の蓄積による遺構の形成過程を指摘できる。栗田遺跡（筑前町）や安国寺遺跡（久留米市）などでは、土器廃棄遺構出土土器と墓坑内出土土器との間で破片が接合する事例が確認されている。これらの遺跡では、土器廃棄遺構が墓群の外側だけでなく内部に位置する場合もある。弥生時代中期前半までは土坑や溝によって墓域を区画していたが、中期後半以降は墓域ではなく墓群を区画する目的へと変化したことがうかがえる。

筑紫・筑後地域の様相は、筑後川を介して、上流の日田盆地でも共有される。しかしながら、さらに上流の山間部では、五馬大坪遺跡（日田市）のように、明確な掘り込みをもたない土坑に、少数の土器が単発的に廃棄される現象が認められる。筑紫・筑後地域から距離が離れるにつれて、土器廃棄行為が変化している。

福岡平野や早良平野では、群集墓において複数回にわたって土器を廃棄する大型土坑を墓域に設けることは一般的ではない。長期間にわたる非常に多数の甕棺墓群が調査された吉武遺跡群（福岡市）でも、土器廃棄遺構の検出事例は少なく、一回だけ土器を廃棄した小土坑がみられる程度である。

中期後半～末で注目されるのが、糸島地域の様相である。三雲南小路遺跡（糸島市）のような、区画墓の周溝に時期差をもって土器を廃棄する事象が確認できる。出土土器は、壺（大型広口壺、袋状口縁壺）・甕・高杯が主体である。

以上のような墓域に土器廃棄遺構を設置する行為は、基本的には弥生時代中期の北部九州地域を中心とする甕棺墓分布圏の習俗である。大型専用甕棺を埋葬に用いる風習は、北部九州地域から南方向には、熊本平野部や宇土半島基部までは面的に、薩摩半島西岸部までは点的に広がる。しかしながら、墓域に土器廃棄遺構を設置する事例は、上枇杷遺跡（みやま市）や羽山台遺跡（大牟田市）など、有明海沿岸の筑肥山地付近が南限である。

一方、甕棺墓が墳墓の主体ではない地域でも、墓域に土器廃棄遺構が設置されることがある。響灘沿岸・周防灘沿岸の馬場山遺跡（北九州市）や下稗田遺

表１　土器廃棄遺構の特徴

地域		西北九州	北部九州		東九州			中九州
		大村	糸島	筑紫・佐賀	日田	宇佐	別府湾	阿蘇
代表的遺跡		富の原	三雲・井原ヤリミゾ	栗田、安国寺、吉野ヶ里など	大肥中村、五馬大坪	樋尻道、野口など	丹生川坂ノ市条里跡	幅・津留
時期		中期後半～後期前半	中期後半～後期前半	中期前半～後期前半	中期後半	中期後半	後期後葉～終末期	中期後半～後期前半
墳墓	種類	甕棺墓 石棺墓	甕棺墓 木棺墓 土坑墓	甕棺墓	甕棺墓 木棺墓 石棺墓	土坑墓 石蓋土坑墓	石棺墓 土坑墓	土坑墓 木棺墓
	密集度	群集	群集 ＋特定個人	群集	群集	群集	群集	群集
廃棄遺構	形態	不定形 （浅い土坑・礫混じり）	不定形 （土坑、溝）	不定形 （土坑、溝）	不定形 （土坑、溝）	不定形 （土坑、溝）	不定形 （土坑）	不定形 （溝）
	位置	墓群の外側	墓群の外側	墓群の外側 （一部墳墓重複）	墓群の外側	墓群の外側 （墳墓重複多数）	墓群の周辺 （一部墳墓重複）	墓群の内側
土器	様式	須玖式（西） ＋黒髪式	須玖式（西）	須玖式（西）	須玖式 （西・東）	須玖式 （西・東）	安国寺式	須玖式（西） ＋黒髪式
	器種組成	甕、壺、高杯	甕、壺（広口壺）、高杯	多種。甕、壺（広口壺）、高杯、鉢、器台、筒形器台、特殊器形土器など。	甕、高杯、筒形器台	甕、高杯	甕、壺（複合口縁壺、直口壺、長頸壺）、高杯、鉢、脚付鉢、器台	甕、壺（袋状口縁壺、広口壺、長頸壺）、高杯
	数量	多量	少量	多量	少量	少量	多量	多量
	完形率	低い（細片）	高い	高い	高い	高い	高い	高い
	赤彩率	須玖式：高 黒髪式：低	高い	高い	須玖式：高	須玖式：高	低い	須玖式：高 黒髪式：低
	破砕行為	なし	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠
	破砕頻度	低い	低い	低い	低い	低い	高い	非常に高い
	廃棄回数	複数回	一回？	複数回	一回？	複数回	複数回	複数回

跡（行橋市）では、在地墓制の主体は土坑墓であるが、墓群の外側を区画する位置に土器廃棄土坑が設置される点で、甕棺墓分布域と共通する。一方で、宇佐地域の野口遺跡（宇佐市）や樋尻道遺跡（宇佐市）では、主体の墳墓は土坑墓や石蓋土坑墓である。これらの遺跡では、墳墓と土器廃棄土坑の重複が大きく、区画の意味が不明瞭である。また、大村湾沿岸の富の原遺跡（大村市）では、甕棺墓も数基確認されるが、在地墓制の中心は石棺墓である。当遺跡では、墓域の外側を区画する位置に大きな土坑があり、土坑内からは赤彩土器を含む多数の土器の小破片や石礫が出土する。墓域における土器廃棄遺構の設置規則や使用方法が確固たるものではなく、在地墓制の状況に合わせて柔軟に変化している状況が分かる。

弥生時代中期後半以降の北部九州地域における土器廃棄遺構および出土土器の特徴を第１表、関連遺跡を第１図に示す。

［弥生時代後期～終末期］

弥生時代後期以降になると、北部九州地域全域で墓域の土坑や溝に土器を廃棄する事例が減少するが、井原ヤリミゾ遺跡（糸島市）や井原上学遺跡（糸島市）、

二塚山遺跡（上峰町）など、糸島地域・佐賀地域では継続する。二塚山遺跡では、後期前半まで土器廃棄土坑を墓列外側に設置するが、対象が特定少数の墓群に絞られている。また、高島遺跡（北九州市）では、後期後半～終末期にかけて、墓域内の土坑や溝の複数回の掘削や、土器を複数回廃棄した痕跡が認められる。

弥生時代終末期になると、瀬戸内～近畿と共通する器種である有段高杯を中心とする墳墓の土器祭祀が糸島地域から早良平野以東の博多湾沿岸域へ、さらには東北部九州に拡大する（森本 2018）。

東九州では墓域での土器廃棄遺構の事例は少ないが、別府湾沿岸の丹生川坂ノ市条里跡第 13 次調査で後期後葉～終末期の遺構が確認されている。まず土坑を掘削した後に、土坑に重複しながら複数の箱式石棺が築造されるのと併行して土器廃棄が行われる。壺・高杯・脚付鉢や器台を中心に、ススが付着した甕も多く出土する。多くの土器に焼成後穿孔が行われる（井・坪根 2018）。

1-3　集落域における土器廃棄遺構

［北部九州の土器廃棄遺構］

土器廃棄行為が確認されるのは墓域が多いが、地域によっては集落域でも出土する。出土遺構の種類は、土坑、井戸、溝、住居跡（竪穴住居跡、掘立柱建物跡）などがある。

集落域の土坑での土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期前半～中頃の筑紫・佐賀地域である。定形的な土坑に多量の土器が廃棄される点が特徴である。赤彩土器だけでなく、無塗彩土器や黒彩土器も多く出土する。具体的には、大板井遺跡（小郡市）、天建寺南島遺跡（みやき町）などがあげられる。後期～終末期にかけては、比恵遺跡（福岡市）や以来尺遺跡（筑紫野市）などで、円形や方形の周溝状遺構に土器がまとめて廃棄される事例が確認される。

井戸における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半～後期初頭の福岡平野に集中する。具体的には、比恵遺跡（福岡市）、本堂遺跡（大野城市）などがある。器種組成としては、赤彩の袋状口縁壺や瓢形土器、双孔広口壺が特徴である。層位的な出土状況を踏まえると、井戸設置時や廃絶時における土器廃棄が多い。モモの種子なども出土することから、祭祀儀礼的行為であると考えられる。

溝や河川における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半～末が中心である。福岡地域、響灘沿岸地域、壱岐、島原半島など、北部九州一帯の広い地域で確認できる。多種多様な器種が多量に廃棄される点が特徴である。那珂遺跡（福岡市）や久保園遺跡（福岡市）のように、溝内に小区画を設置して土器を廃棄する事例もある。糸島地域の元岡桑原遺跡群（福岡市）では、弥生時代中期後半～古墳時代前期前半の長期間にわたって、河道への多量の土器廃棄が行われた。日常土器だけでなく外来系土器や、ミニチュア土器や特殊器形の土器なども多数出土している。

住居跡における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半の福岡地域・筑紫地域である。筑紫地域では、下高橋馬屋元遺跡（大刀洗町）で検出された竪穴住居のように、焼失住居に対する土器廃棄行為が確認できる。また、高木遺跡（古賀市）のように、掘立柱建物跡の柱穴の中に多量の土器が詰め込まれている事例があり、建物廃絶時の祭祀行為と考えられる。

［中九州における土器廃棄遺構の特徴］

中九州では住居跡を中心とする集落域で土器廃棄行為が確認されることが多い。宮山遺跡（阿蘇市）では、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡の主柱穴に、赤色の縦縞文様を施した壺を二つに割って各柱穴に入れている。前田遺跡（玉名市）では、弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡から多数の赤彩土器が出土しており、住居廃絶儀礼にともなう土器廃棄行為であると考えられる。出土土器には、黒髪式土器の甕・壺・鉢・高杯・器台だけでなく、須玖式土器の赤彩された甕・高杯・筒形器台がある。地蔵原遺跡（南小国町）では、遺構の性格は不明であるが、弥生時代中期後半～後期前半の集落域から多数の赤彩土器が出土している。黒髪式土器の甕・壺だけでなく、遠賀川以西系須玖式土器の赤彩された甕・高杯・筒形器台・袋状口縁壺・鉢、遠賀川以東系須玖式土器の赤彩長頸壺や多条突帯広口壺など、九州北半部一円に由来する土器が出土している点が特徴である。

一方で、墓域における土器廃棄行為はみられない。新南部遺跡群第 11 次調査地点（熊本市）では、弥生時代中期前半～後半の区画墓と考えられる甕棺墓群を区画する溝状遺構が検出されたが、多量の土器を廃棄する行為は確認できない。大道小学校（山鹿市）では、成人用甕棺の周辺からまとまった土器群が出土した。黒髪式土器の壺・高杯と須玖式土器の赤彩の甕・袋状口縁壺・高杯である。出土状況が不明な点が多いが、中九州では少ない墓域における土器廃棄行為として注目される事例である（隈 1983）。

なお、北部九州地域に分布中心をもつ大型専用甕棺は熊本平野部では出土する[1)]が、阿蘇カルデラ内では現時点で確認されていない。

1-4　小結

北部九州地域の概要を踏まえた上で、幅地区の墓域における土器廃棄遺構の位置づけを検討する。

まず、墓域における土器廃棄遺構の設置は北部九州地域全域で確認できるが、時期や地域ごとに様相が異なる。弥生時代中期段階は筑紫・佐賀地域が中心であるが、後期以降になると糸島地域や東北部九州に比重が移る。中九州では、大型専用甕棺にともなう葬送儀礼としての墓域における土器廃棄行為は受容しておらず、集落域における土器廃棄行為のみが確認できる。つまり、墓域の土坑や溝から多量の土器が廃棄された状態で出土する幅地区のような状況は、白川下流域の熊本平野、白川中流域の菊池盆地、阿蘇外輪山などの阿蘇カルデラ周辺地域では、現時点では類例を確認できない。隣接地域間の情報伝達や風習の共有というよりも、遠隔の北部九州地域との直接的関連を想定する必要がある。

墳墓と土器廃棄遺構の位置関係を検討すると、幅地区では両者が重複せずに設置されることから、弥生時代中期後半以降の筑紫・佐賀地域や日田地域との類似性が高い。宇佐地域・別府湾沿岸地域などの東九州の土器廃棄遺構は墳墓との重複が大きく、区画の意識が明瞭ではない。幅地区の場合は、土器廃棄遺構が墓群の内側に位置する点が他地域とは異なるが、これは墓域の形成過程における結果であり、基本的には墓群を区画する意識が強いと考えられる。また、特定個人墓ではなく集団墓を対象とする点も特徴である。

したがって、遺構の特徴からは、北部九州地域の中でも特に筑紫・佐賀地域や日田地域との関連が指摘できる。これらの地域をつなぐのは筑後川であり、河川や山間部を介した北部九州地域と阿蘇カルデラの地域間交流を示唆するものである。

2　幅地区の墓域から出土した土器の特徴

2-1　時期と器種組成

土器廃棄遺構の出土土器の時期は、弥生時代中期後半～後期前半が中心である。

出土土器は、中九州を中心に分布する黒髪式土器と、北部九州を中心に分布する須玖式土器で構成される（表２）。黒髪式土器は、無塗彩の甕と壺（広口壺・長頸壺・短頸壺）、赤彩および無塗彩の長頸壺である。須玖式土器は、赤彩の甕、高杯、袋状口縁壺である。特殊な器形の土器はなく、基本的な器種で構成される。白川下流域の熊本平野部では蓋や器台が確認できるが、幅地区では確認できない。また、須玖式土器の筒形器台は、地蔵原遺跡・前田遺跡など周辺地域では確認されるが、阿蘇カルデラ内での出土事例はない。

須玖式土器は、福岡平野や筑紫・佐賀平野に分布中心がある遠賀川以西系須玖式土器であり、東北部九州に分布中心をもつ遠賀川以東系須玖式土器は出土しない。須玖式土器がほぼ赤彩土器に限定される点も注意される。なお、日田地域では、遠賀川以西系須玖式土器と以東系須玖式土器が、無塗彩土器と赤彩土器の両方で併存する。また、阿蘇外輪山北側に所在する地蔵原遺跡（南小国町）で出土する土器は、基本的には遠賀川以西系須玖式土器と黒髪式土器で構成されるが、直口縁で口縁下に一条の三角突帯をもつ赤彩長頸壺と

表２　廃棄遺構出土土器の器種と塗彩の関係

	甕	壺				高杯	鉢
		広口壺	袋状口縁壺	長頸壺	短頸壺		
黒髪式	○	○	○	○	○		△
須玖式	○	△	○			○	

出土量：○多 △少　■ 赤彩

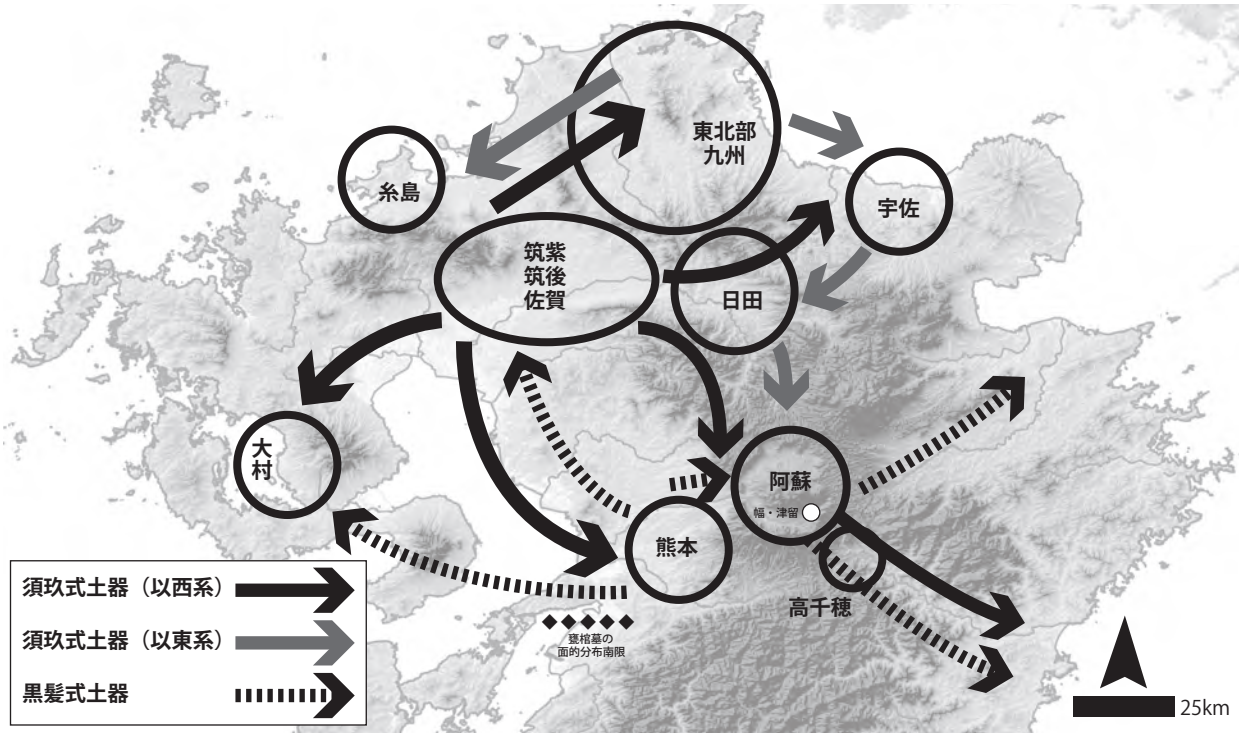


図 2　土器からみた地域間関係

多条突帯広口壺に遠賀川以東系須玖式土器の影響を確認できる。しかしながら、阿蘇カルデラ内においては遠賀川以東系須玖式土器が出土しないことから、地理勾配に応じた器種の減少が確認できる（図 2）。

幅地区で出土する須玖式土器は、形態的特徴は北部九州地域に由来するが、黒味が強い赤色顔料や、全面塗彩だけでなく文様状塗彩などの赤色顔料の塗彩方法の点から判断する（石田 2010）と、搬入品ではなく、阿蘇在地または近隣地域で製作されたものと考えられる。ただし、茶褐色系胎土に明るい発色の橙色系赤色顔料が薄く塗彩されている赤彩甕（SD3-RP162）など、他とは異なる特徴をみせる資料もあることから、一部は搬入された可能性もある。より正確な土器の製作地については、胎土分析による検討が今後必要である[2)]。

幅地区の墓域出土土器は、北部九州（SD2-RP135、SD3-RP207 など）や東九州（SD3-RP208、SX11-RP333 など）の土器が少量含まれる程度であり、他地域からの搬入土器が少ない。在地製作と考えられる甕・壺などの基本器種組成で構成されている点が特徴である。

2-2　赤彩土器からみた地域間交流

弥生時代中期後半～末の須玖式土器の赤彩甕は形態の規格性が高い。特に、甕胴部突帯の施文位置が、口縁部直下に一条突帯、胴部最大径付近の胴部中位に一～三条突帯をつける点で共通している。赤彩甕については、胴部中位の突帯本数に応じて分布中心地域が異なることが指摘されている（下條 1991）。具体的には、一条突帯が福岡・筑紫地域、二条突帯が東北部九州・筑豊地域、三条突帯が宇佐・大分地域である。すべての種類が出土するのは日田地域である。幅地区では、一条突帯・二条突帯・三条突帯の多様な突帯本数の赤彩甕が出土している。各分布中心地域からそれぞれ流入してきたと考えるよりも、複合的に共存している日田地域から南小国を経て阿蘇カルデラ内に入るルートで赤彩甕または土器製作情報が流入した可能性が高い。

須玖式土器を細かく検討すると、筑後川下流域の土器と類似する要素を見出すことができる。具体的には、2 ～ 3 本単位の暗文の施文（SD3-RP176）、高杯脚部中位の M 字状突帯（SD3-RP171）などの点は、筑紫・

筑後・佐賀地域の特徴である。

一方で、赤彩袋状口縁壺の袋状口縁下位に三角突帯を一条つけたり、頸胴部境界や肩部に 2 ～ 4 条の三角突帯をつけたりする資料（SX11-RP309・310・312 など）は、北部九州地域の袋状口縁壺では確認できない。肩部に多条突帯を付す方法については、黒髪式土器の長頸壺との関係が想定される。赤色顔料の塗彩方法についても、多くの赤彩土器は全面塗彩で丁寧なミガキ調整を施すものであるが、赤色顔料を縞模様状に施文する資料（SD3-RP188、SX11-RP314 など）がある。つまり、これらの資料は、基本的な形態的特徴は須玖式土器に基づくものの、突帯や塗彩などの装飾については阿蘇地域独自の要素を加えて製作された土器であるといえる。

また、九州島のほぼ中央部に位置する阿蘇が九州東西をつなぐ重要な場所に位置する点は従来から注目されてきた。特に、阿蘇山を中心にして、東側の大野川流域と西側の白川流域は弥生時代を通じて相互の影響があり、前期は後者から前者へ、中期は両者、後期は前者から後者へと各時期ごとに影響関係が変化することが指摘されている（島津 1980）。このような影響関係は、中九州を中心に分布する黒髪式土器や免田式土器の分布から指摘されることが多かった。須玖式系の赤彩甕も、五ヶ瀬川上流域の高千穂での出土が確認されている（沢 1972）。高千穂方面への黒髪式土器や須玖式土器の移動に関しては、阿蘇カルデラ内の最南東端に位置する幅・津留遺跡が山間部の交通の結節点として重要な位置を占めたと考えられる。

2-3　意図的破砕行為（図 3）

幅地区の土器廃棄遺構から出土する土器は、穿孔や打ち欠きなどの意図的破砕行為の頻度が非常に高い点が特徴である。器種ごとに破砕パターンが明瞭である。

赤彩の袋状口縁壺・長頸壺は底面全体を打ち欠くものが多数を占める（SX11-RP310・323 など）。打ち欠きの周縁部を細かく打ち欠いて調整する場合もある。底面の一部や胴部下位、頸部に穿孔を施すものもあるが少数である。底面に穿孔した短頸壺もみられる（SD3-RP185 など）。

また、高杯の杯部に穿孔を施すものが一例確認できる（SD3-RP177）。北部九州地域では、長頸壺の頸部、高杯や筒形器台の脚部など、長い部位を持つ器種は該当箇所で折り割る破砕行為が多いが、幅地区では折損

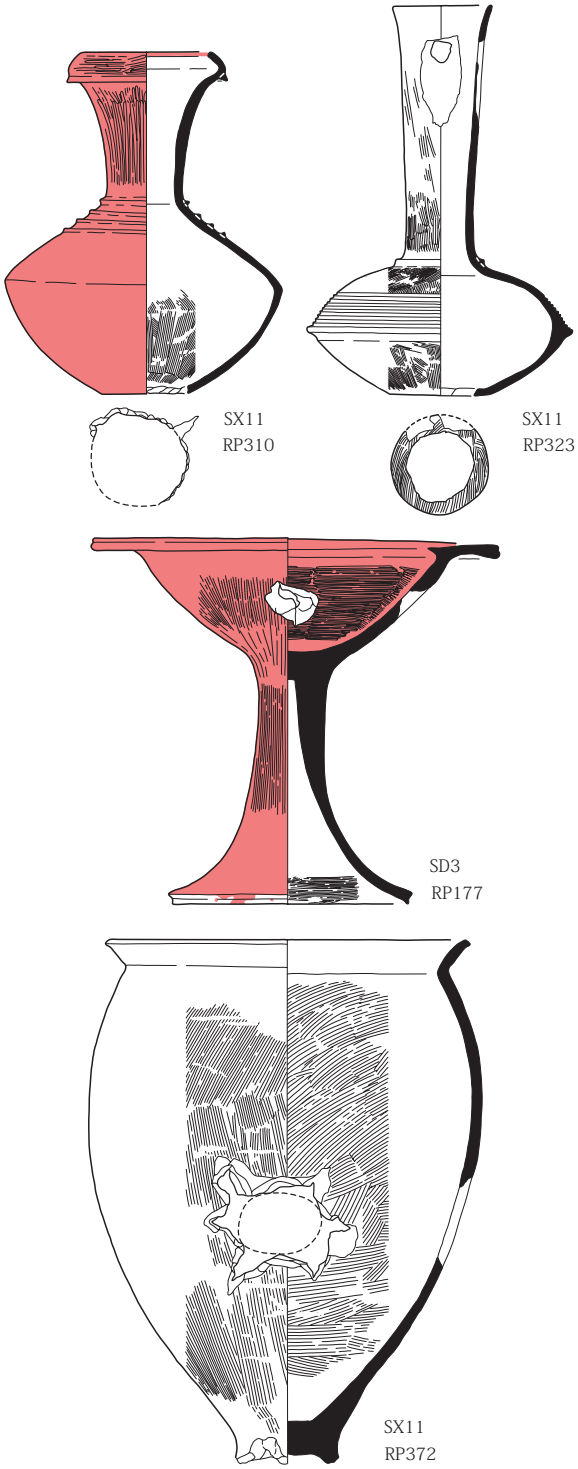
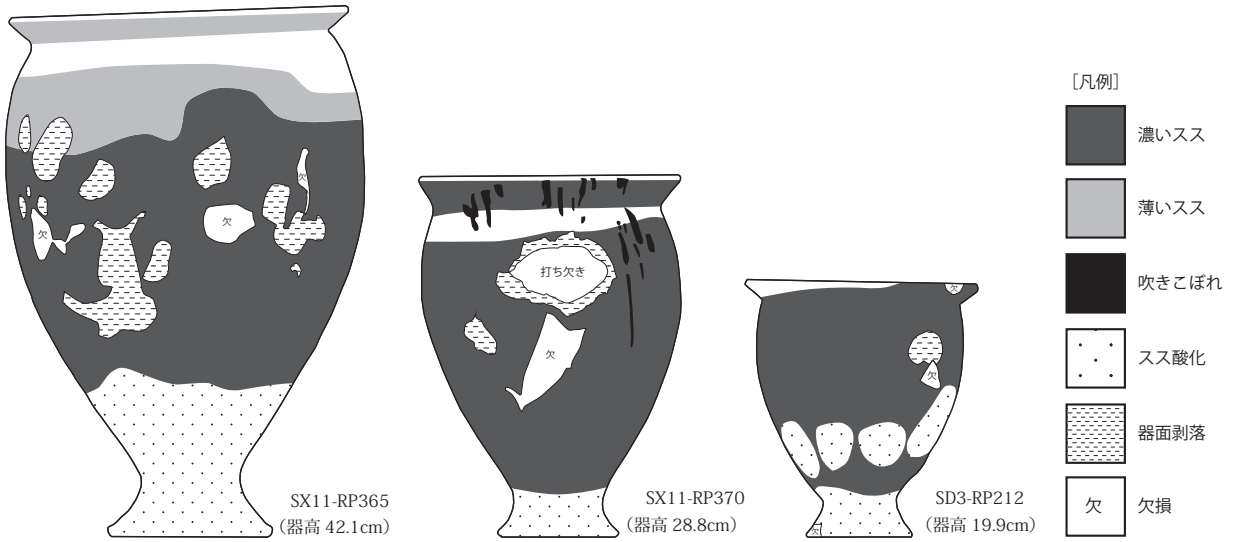


図 3　土器の破砕行為



SX11-RP365 外面：
スス付着範囲と剥落痕の対応関係

SX11-RP370 外面（胴部上位拡大）：
吹きこぼれ痕跡とススの関係

SD3-RP212 外面（底部付近拡大）：側面加熱痕跡

図４　土器の使用痕跡

行為は確認できない。

無塗彩の黒髪式土器の甕や壺は、胴部上位～中位を打ち欠くものが多い（SX11-RP372 など）。いずれも大きく割られており、打ち欠き周縁部を細かく調整することはない。なお、黒髪式土器の台付甕の中には、脚台部を打ち欠いた資料がある。ただし、打ち欠いた断面にススが付着していることから、煮沸使用時にすでに打ち割ったものであると考えられ、葬送儀礼にともなう行為ではないと判断できる。

また、土器廃棄遺構から出土した土器は完形率が非常に高い。土器の一部を破砕することはあっても、基本的には完形の状態で土器を廃棄していると考えられる。

2-4　煮沸痕跡からみた土器の使用方法（図 4）

幅地区の土器廃棄遺構から出土する黒髪式土器の無塗彩甕の特徴として、器表面にススやコゲが付着し、煮沸使用頻度が非常に高いものが多く含まれる点があげられる。具体的には、SD3-RP212・239・240、SD5-RP409、SX11-RP337・354・359・361・365・370・371・372・375 などである。使用頻度が高く、外面にススが顕著に付着しているため、使用回数の検

討は困難である。内面のコゲの付着も激しく、複数回の煮沸行為によるコゲの重なりが確認できる。吹きこぼれ痕が残る資料も多く、具体的にはSX11-RP337・354・370などがあげられる。吹きこぼれ痕が残る甕は器高20cm程度の小型甕が中心である。小型甕SD3-RP212には側面加熱痕跡も確認できる。このことから、炊飯に小型甕、その他の煮沸調理に中型甕を用いる器種の使い分けをしていた可能性が高く、他地域の土器の使い方と共通する（小林編2011ほか）。

特に、器面の剥落が激しい資料が多い点が注目される。ただし、剥落部位がスス付着範囲に限られること、剥落部位の上にススなどの付着は見られないことから、意図的な破損の痕跡ではない。使用頻度の高さにともなう被熱ストレスの蓄積による器面劣化（小林編2011）が要因として考えられる[3)]。住居跡から出土した甕の使用痕を観察したところ、墓域の土器廃棄遺構出土土器と同様に使用頻度が高いことから、土器を使いこむスタイルが幅・津留遺跡の特徴と言える。

甕のスス・コゲ付着状況を観察したところ、胴部上位にススが付着し、脚台部はスス酸化部となるのが、基本的パターンである。幅地区の土器の器種組成に器台や支脚は含まれず、支持物を使用した痕跡もないことから、甕の脚台部付近に薪を直接あてたと考えられる。住居跡内部で検出された炉の壁面が被熱していることから、灰穴炉ではなく、炉の内部で直接薪を燃焼させたと思われる。これは土器に残る痕跡と整合性が高い。

器表面のススと意図的破砕痕跡の切り合い関係を確認すると、スス→破砕行為の順番で施されている。土器廃棄時に破砕行為をしたことは指摘できるが、最後の煮沸行為が日常生活時か、葬送時なのかは不明である。ただし、幅地区では、埋葬にともなう葬送儀礼の際に未使用の新しい土器を用いたのではなく、日常生活で何回も煮沸に使用した土器を廃棄したことが推測できる。墓域の土器廃棄遺構で出土する煮沸痕跡のある土器は、葬送行為の一環で実施される共飲共食で用いた土器を片付ける目的で廃棄したものと解釈されることが多いが、幅地区の事例は異なる。

なお、幅・津留遺跡では、脚台部を打ち欠いた甕や壺も煮沸に用いた痕跡が確認できる。

3　考察

3-1　幅地区の墓域における土器廃棄遺構の検討

墓域に土器廃棄遺構が設置される事例としては、中九州において幅地区は特異な存在である。墳墓形態として甕棺墓は導入していないが、甕棺葬に付随する葬送時における土器廃棄行為は導入している。埋葬にかかわる行為をセットで導入するわけではなく、在地の状況に合わせて柔軟に対応していることが分かる。

墓域における土器廃棄遺構の位置については、墓域設定後の早い段階で土坑や溝を設置していることから、当初は何らかの区画の意図があったことが想定できる。土器廃棄遺構内の土器群のまとまりと個別墳墓の対応関係については、墳墓の時期を判断できる根拠が少ない幅地区においては検討が困難であるが、特定個別墳墓と対応するというよりも、集団墓あるいは墓群に対応すると考えられる。また、墓域や墓群の外縁ではなく、墓群の内部に土器廃棄遺構が配置される点は、弥生時代中期後半期における筑紫・筑後地域の集塊状の墓地の状況と類似する。

筑紫・筑後地域と阿蘇地域の間に位置する筑後川上流域の日田地域では、大型専用甕棺や副葬品の状況を踏まえると、筑紫・筑後地域に準じる形で、弥生時代中期以降に甕棺葬が受容されている。また、日田地域では、弥生時代中期後半以降に小単位の河川流域や矮小な谷部に大小集落が展開する状況が指摘されている（渡邉編2014）。日田盆地南方の山間部に所在する五馬大坪遺跡（日田市）では、墓域の端に小規模な土器廃棄遺構を設置する事例が確認されている。集落域における土器廃棄行為が確認できる地蔵原遺跡（南小国町）の位置を考慮すると、日田盆地から南方向に、筑後川最上流域から杖立川を経て阿蘇カルデラ内へと小河川流域を介して地域がつながるルートを想定できる。

阿蘇カルデラ内の弥生時代諸遺跡の基本的な生活様式は、白川流域を通じて西方から阿蘇カルデラ内につながるルートを主軸として、両地域間の共通性が生じている。しかしながら、白川下流域の熊本平野部や菊

池・山鹿地域で大型専用甕棺や須玖式土器は出土するが、墓域で土器廃棄行為を実施した痕跡は認められない。したがって、幅地区で確認された墓域における土器廃棄行為は、白川流域を通じて西方から導入された可能性は考えられない。

幅地区の墓域における土器廃棄遺構の存在は、日常生活と祭祀儀礼のそれぞれの活動レベルで、異なる地域から多様な影響を受けてきた阿蘇地域の独自性が表出したものといえる。

3-2　土器廃棄遺構出土土器の検討

墓域における土器廃棄遺構から出土した土器は、弥生時代中期後半～後期前半が主体である。黒髪式土器と須玖式土器で構成され、器種組成は甕・壺・鉢・高杯を主体とする。塗彩の種類に応じて、無塗彩土器は黒髪式土器、赤彩土器は須玖式土器に多いが、黒髪式土器の赤彩長頸壺が多数出土することから、土器様式に応じて明確に区別できるわけではない。また、黒髪式土器の短頸壺は、無塗彩ではあるが、器面全体を丁寧にミガキ調整し、細かな暗文を施文するなど、非常に丁寧なつくりの土器である。土器様式に応じて精粗が明確に区別できるわけでもない。

須玖式土器の赤彩土器の器種組成が甕・高杯・袋状口縁壺を中心とする点は、筑後川流域の様相と類似する。しかしながら、筒形器台を含まない点が異なる。中九州では、阿蘇外輪山北側の地蔵原遺跡（南小国町）や菊池川流域の前田遺跡（玉名市）では筒形器台が出土するが、阿蘇カルデラ内での出土は確認できない。地理勾配に応じて器種が欠落する事象の一つである。

幅地区の墓域における土器廃棄遺構出土土器の最も大きな特徴が、土器の意図的破砕行為の頻度の高さと、煮沸行為に複数回使用された甕形土器の使用頻度の高さである。土器の意図的破砕行為は、対象となる器種や部位、破砕方法がパターン化しているため、葬送にともなう祭祀儀礼的行為の一環として破砕が行われたと考えられる。祭祀儀礼専用土器として器種分化する傾向が認められないため、日常生活で使用する土器を祭祀儀礼的行為に用いた「仮器」へと変換するために必要な行為といえる。そのような破砕行為が存在しているため、日常生活で複数回煮沸に用いられた甕であっても、祭祀儀礼的脈絡で使用できるのだと考える。

おわりに

集団墓の墓群周辺に土器廃棄遺構を設置する事例としては、幅地区は最南端に位置している。弥生時代中期の甕棺墓制にともなう墓域における土器廃棄行為としては、最も遅い時期まで実施している事例のひとつであり、最終焉の状況を示す点で非常に重要である。

しかしながら、幅地区の状況をみると、特に筑後川を介した筑紫地域や日田地域の様相との類似性が確認できるが、他地域の要素をそのまま単純に取り入れているわけではない。阿蘇在地の状況に合わせて変化させた、幅地区独自の要素が多数みられる。墓域における土器廃棄行為を構成する要素は転換しつつも、墓域で土器廃棄を長期間にわたって継続的に実施する葬送行為が実践される点は、北部九州全体の動向と共通する。

九州全域に及ぶ地域間交流は、弥生時代中期後半期以降に活発化する。特に、九州の南北に中九州系土器が拡大する現象が認められる。幅地区で出土した土器から判断すると、弥生時代中・後期に中九州系土器が拡大する現象の前段階で、すでに阿蘇を中心とする山間部を介した広域の地域間交流の存在を確認できる。従来は青銅器・鉄器などの金属器やガラスなどの稀少品で指摘されることが多かったが、より日常的な交流を反映する土器のレベルや、モノの移動だけではなく葬送儀礼に関わる精神活動のレベルでも同様の事象を指摘できる。特に祭祀儀礼に使用される頻度の高い赤彩土器からは、日常的に使用された無塗彩土器以上に広域の地域をつなぐ状況を読み取ることができる。

近年は、筑後・八女地域の弥生時代中期後半期における須玖式土器と黒髪式土器の共伴関係にかかわる資料や、筑後川中流域の水分遺跡（久留米市田主丸町）における弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけてのジョッキ形土器や多量のガラス小玉・金属器類の出土や赤色顔料生産の痕跡など、中九州と北部九州の密接な関係を示す資料が増加しつつある。また、大野川を媒介とする中九州と東九州の関係についてもさらなる検討が必要である。幅・津留遺跡では弥生時代中期後半～終末期にかけての豊富な資料が出土したことか

ら、今後はより詳細な土器編年を構築することで、河川や峠を介した山間部の交流の具体相が明らかになることを期待したい。

註１　新南部遺跡群（熊本市東区）で出土した甕棺を薄片観察による岩石学的手法で分析した結果、遺跡周辺の白川流域の堆積物は使われておらず、花崗岩を主体とする玉名市北部周辺あるいは福岡県下の堆積物が用いられたことが指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 2016）。なお、目張り粘土については、遺跡近傍の粘土を使用したとの結果が得られた。つまり、正確な搬出元は不明であるが、遠方から甕棺が持ち込まれ、在地の粘土を用いて目張りしたと考えられる。熊本平野部の甕棺に関しては、胎土分析データのさらなる蓄積と詳細な検討が必要である。

註２　地蔵原遺跡では、須玖式土器の赤彩土器および黒髪式土器の無塗彩土器の胎土分析が実施された。岩石学的分析の結果、いずれも在地（南小国付近）で製作された可能性が指摘されている（藤根・小村 2004）。前田遺跡（玉名市）の分析でも同様の結果が出ている（パリノ・サーヴェイ株式会社 2005）。須玖式系の赤彩土器に関しては、一部は北部九州地域から搬入された可能性もあるが、須玖式土器の形態を模して在地で製作した土器が多数を占めると考えられる。

註３　甕本体の出土位置で器表面が剥落した破片も出土することから、器表面の剥落が埋没後に生じたことが分かる。

参考文献

参考文献（五十音順）

石田智子 (2009)「北部九州弥生時代中期の土器祭祀：九州大学筑紫地区 8B 区 SK101 土坑の位置付け」,『奴国の南』, 64-83, 九州大学総合研究博物館 .

石田智子 (2010)「須玖式土器における赤彩土器の意義：色彩の時空間動態の観点から」,『九州考古学』85, 21-47, 九州考古学会 .

石田智子 (2013)「北部九州地域における黒彩土器の展開」,『九州考古学』88, 1-20, 九州考古学会 .

井大樹・坪根伸也 (2018)「東九州の土器祭祀」,『平成 30 年度瀬戸内海考古学研究会第 8 回公開大会予稿集』, 1-18, 瀬戸内海考古学研究会 .

岡本真也（編）(2005)『前田遺跡』, 熊本県文化財調査報告 225, 熊本県教育委員会 .

隈昭志 (1983)「熊本県山鹿市大道小学校出土の弥生土器」,『考古学雑誌』69-1, 74-80, 日本考古学会 .

熊代昌之（編）(2016)『水分遺跡』久留米市文化財調査報告書 364, 久留米市教育委員会 .

小林正史（編）(2011)『土器使用痕研究：スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元』.

土野雄貴 (2016)「熊本県における弥生時代埋葬遺構集成：白川流域編Ⅰ」第 1.1 稿 , 廣田静学・宮本大・尾崎潔久・福田匡朗（編）『新南部遺跡群（10 次・11 次）・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320, 附論 1-37, 熊本県教育委員会 .

沢皇臣 (1972)「宮崎県西臼杵郡高千穂町押方神社周辺の遺跡」,『九州考古学』45, 6-13.

島津義昭 (1980)「山の考古学」,『国分直一博士古稀記念論集：日本民族文化とその周辺：考古篇』, 53-116, 新日本教育図書株式会社 .

島津義昭（編）(1992)『二子塚』熊本県文化財調査報告 117, 熊本県教育委員会 .

下條信行 (1991)「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」,『古文化論叢』, 77-106, 児島隆人先生喜寿記念事業会 .

高谷和生（編）(1987)『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告 88, 熊本県教育委員会 .

玉永光洋 (1982)「豊後における肥後型土器について」,『九州考古学』57, 11-19, 九州考古学会 .

常松幹雄 (2016)「北部九州からみた新南部遺跡群（11 次）の墓制」, 廣田静学・宮本大・尾崎潔久・福田匡朗（編）『新南部遺跡群（10 次・11 次）・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320, 399-410, 熊本県教育委員会 .

西健一郎 (1982)「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」,『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 ,445-470, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 .

西健一郎 (1983)「黒髪式土器の基礎的研究」,『古文

化談叢』12, 77-104, 九州古文化研究会 .
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2005)「前田遺跡出土遺物の自然科学分析」, 岡本真也（編）『前田遺跡』熊本県文化財調査報告 225, 377-392, 熊本県教育委員会 .
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2016)「新南部遺跡群 11 次及び吉原遺跡の胎土分析」, 廣田静学・宮本大・尾崎潔久（編）『新南部遺跡群（10 次・11 次）・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320, 371-386, 熊本県教育委員会 .
古屋紀之 (2007)『古墳の成立と葬送祭祀』, 雄山閣 .
弘中正芳 (2010)「小野原遺跡群出土の土器」, 宮崎敬士（編）『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告 257, 167-179, 熊本県教育委員会 .
藤根久・小村美代子 (2004)「地蔵原遺跡出土土器の胎土分析（薄片法）」, 山下義満（編）『地蔵原遺跡』熊本県文化財調査報告 220, 65-71, 熊本県教育委員会 .
宮崎敬士（編）(2010)『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告 257, 熊本県教育委員会 .
森本幹彦 (2018)「北部九州の土器祭祀：弥生時代後半期の玄界灘沿岸地域を中心に」,『平成 30 年度瀬戸内海考古学研究会第 8 回公開大会予稿集』, 95-114, 瀬戸内海考古学研究会 .
山下義満（編）(2004)『地蔵原遺跡』熊本県文化財調査報告 220, 熊本県教育委員会 .
笠健（編）(2002)『南鶴遺跡』白水村文化財調査報告 1, 白水村教育委員会 .
渡邉隆行（編）(2014)『吹上Ⅵ』日田市埋蔵文化財調査報告書 112, 日田市教育委員会 .